

本救十二天宮

本救の塙はあり真言宗多聞院別當奉祀

七祭神ハ十二天神躰ハ海上出現と云尤佳景の地なり神

谷川の臺より眺望もこの絶壁ハもろり此社の右に

裏手に聳立ちまの巨巖このなりと巖頭数株の松梅

鬱蒼と栄茂せり本救の地ハ川田原北条家の分限帳に左傍に

大夫領する由んえと此地に百段文同橋本

吾妻明神社同所六町斗南の方原宿といふあり相傳ふ

天和年間此地の獵人吉太夫といふもの此海上に網を投

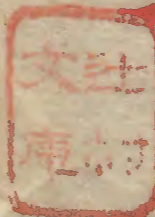
し當社の神躰を得し本像ハ髻鬘の依り小祠を

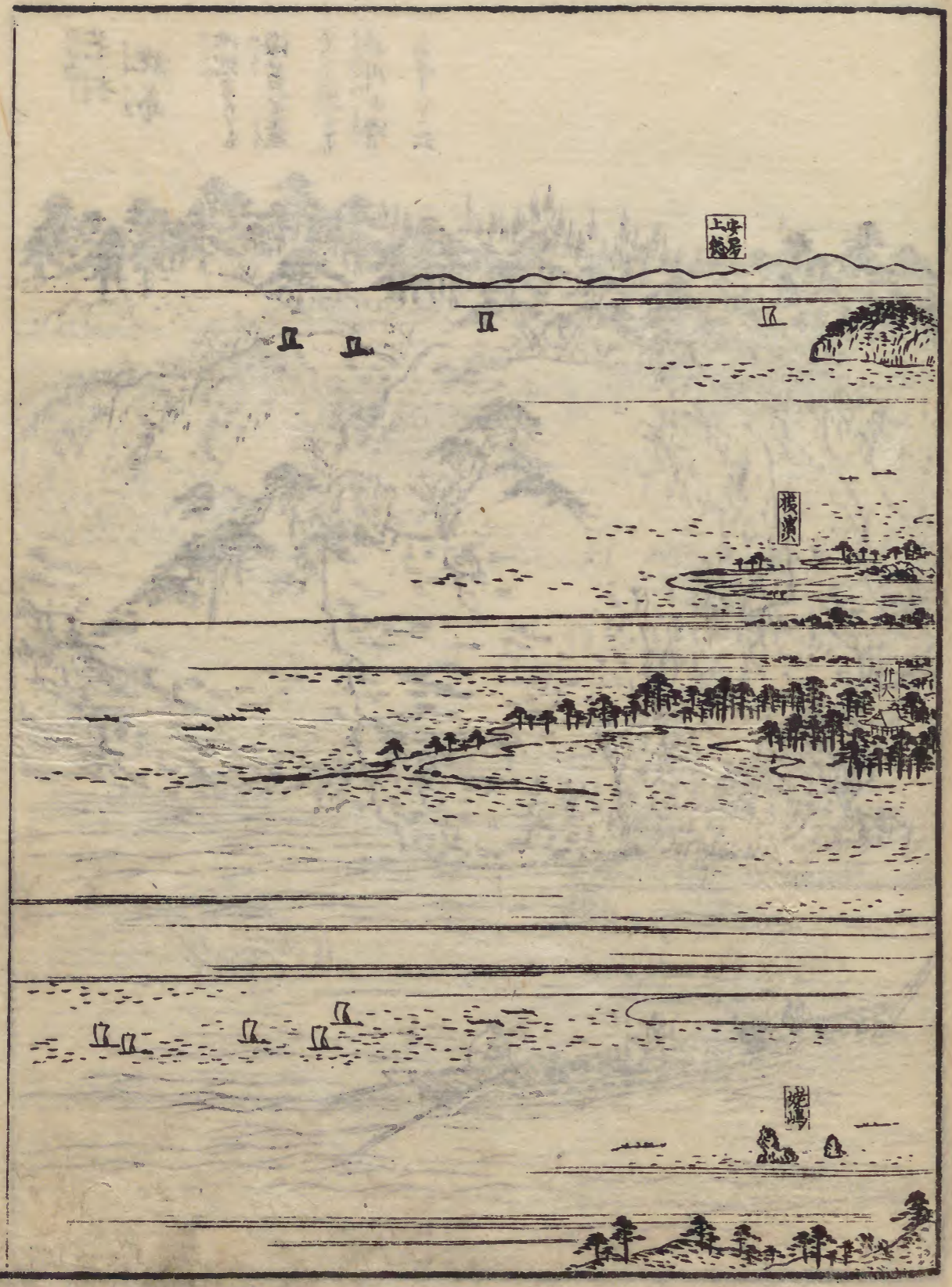
堂に置く云此神躰ハもと南總本更津吾妻明神の神

像ハ浪に漂ひ此地に止り祭神ハ皇十一代

垂仁天皇の皇子日本武尊初の御名を以小碓命と奉

武藏相模の際と尊の東征御經過の地とて以て所々





横濱
辨財天社





芒村
焼島
此地の
海苔を産
まるとも
呂川増
らすと云



うんゆのまか
 本牧場
 あつとんりやう
 十二天社

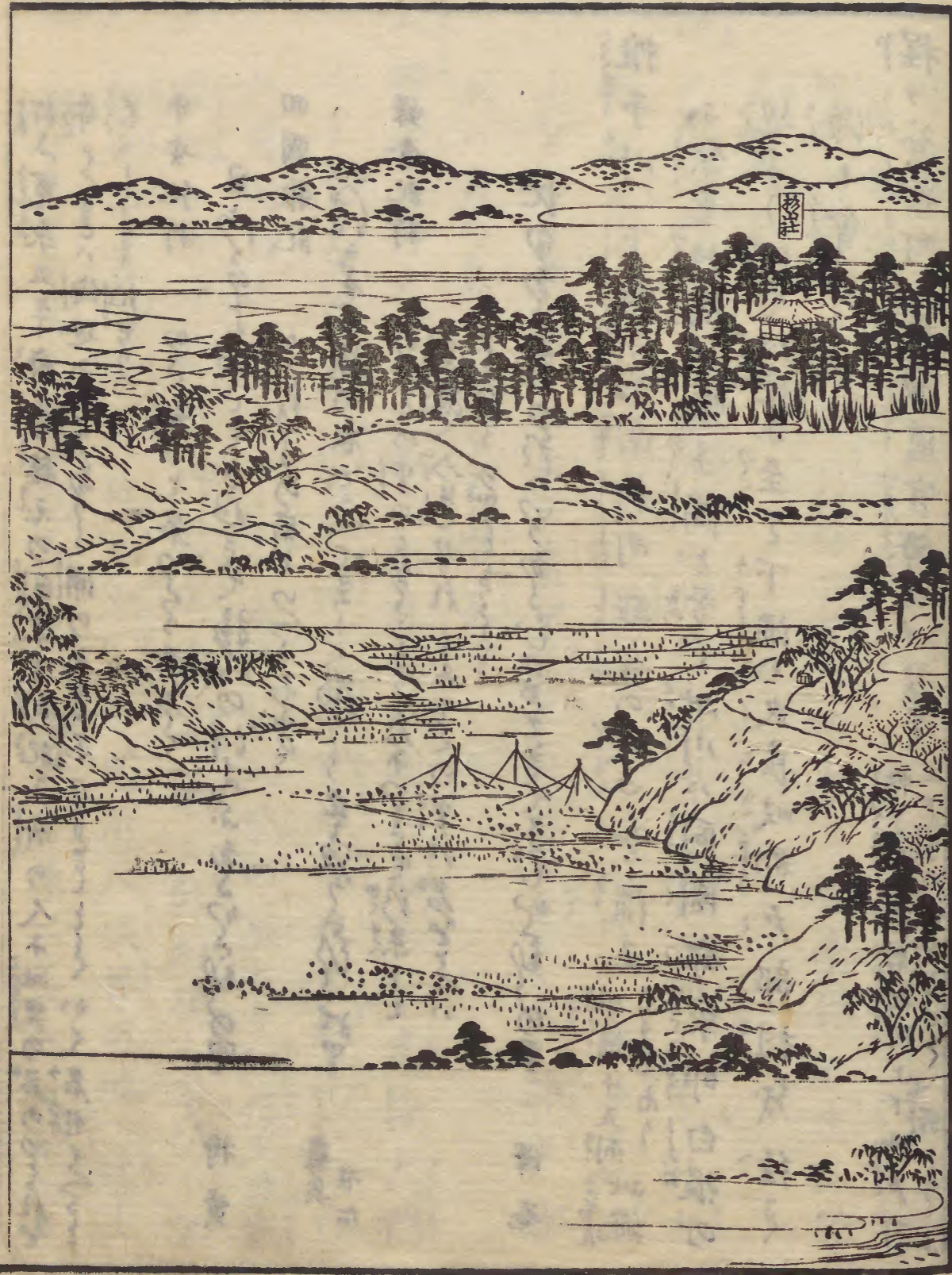


二八四十一



本牧
吾妻権現宮





杉山明神社
延喜式内都築
郡杉山神社是
なり

稱入寛永五年齊藤徳之の殿東下向記に所の人小此里の君のつれと尋らむと海辺ありあり浦のありありなるをかく名解とせり

平安紀行 かく切ると若つる所あり

日ゆりまをかくとせむと旅人の汗ふあつたの里

持資

田園雜記

くひりの宿とつるあり

道奥 准后

鎌倉記行

つれなきう旅の衣とてまーしつるをたつてつれなき

かこの里のそとよりたつてつれなきをたつてつれなき

地白ある里のつれなきをたつてつれなきの里

澤庵

帷子川 下帷子の南新町驛舎の入口と流る 川幅十五間 此流

お架を板橋と帷子橋と号く此川ハ同國都築郡白根の

辺よりつれなき此地小至る下流ハ久良岐郡戸部村城経く

海小會を

程ヶ谷新町 東海道官驛の二なり

帷子町上下岩間町上下神戸町上下の地を合せし一驛とせり

或ハ慶長或ハ慶安二年原慶長又ハ治年間ともこの説一がくすは茶家の公限帳に三郎と云人の所領小札の保土ヶ谷とあり此地を龍ハ小初ハ馬一と云とあり

神奈川より此地迄行程二里九町あり 驛亭軒と連糸繫

昌の地より 橋を架しつる 神戸橋と号くまゝハ水源ハ田間の水落集りて流

きをたし新町より右の裏と流き此地至る末ハ神戸岩

間の左の裏を回りつる帷子川入

大神宮 神戸の地小あり 街道の右側ハ鳥居を建侍大門

三丁あまりのを入る社あり 神主岡田氏奉祀を祭礼ハ六月

九月両月の十六日中つる九月を大祭の辰とを相傳ふ往古

當社の御神武川御厨庄榛谷峯ハ影向なりあひしと

後世川井二股川程ヶ谷宮林同所八坂等の地へ迂し

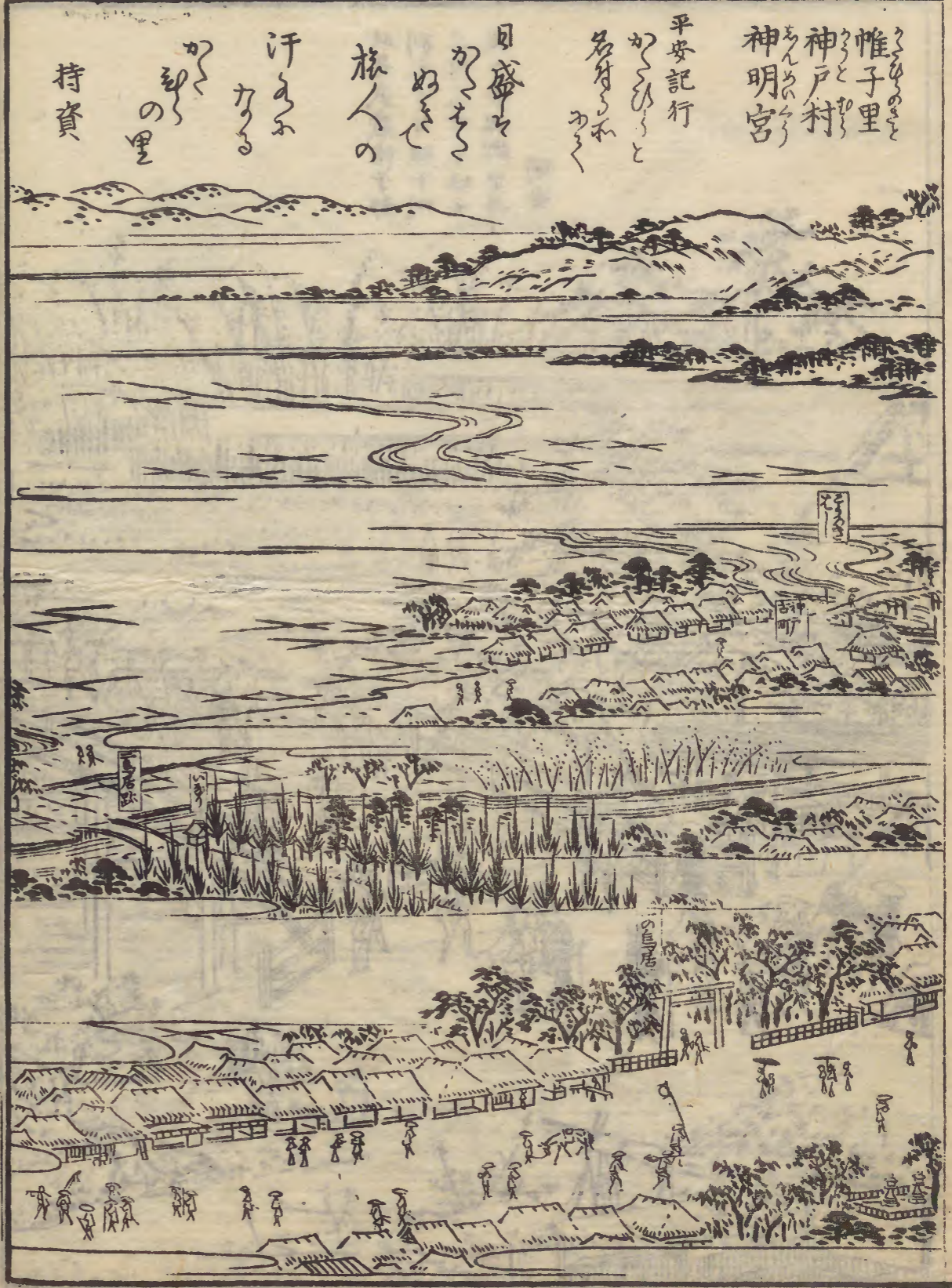
まゆりせりし 神託あるを以終る嘉祿二年九月十六日

此是武藏惟子郵
 別家十日經十州
 只思父母不姑舍
 夜々夢魂鄉里遊
 閻齋



惟子川



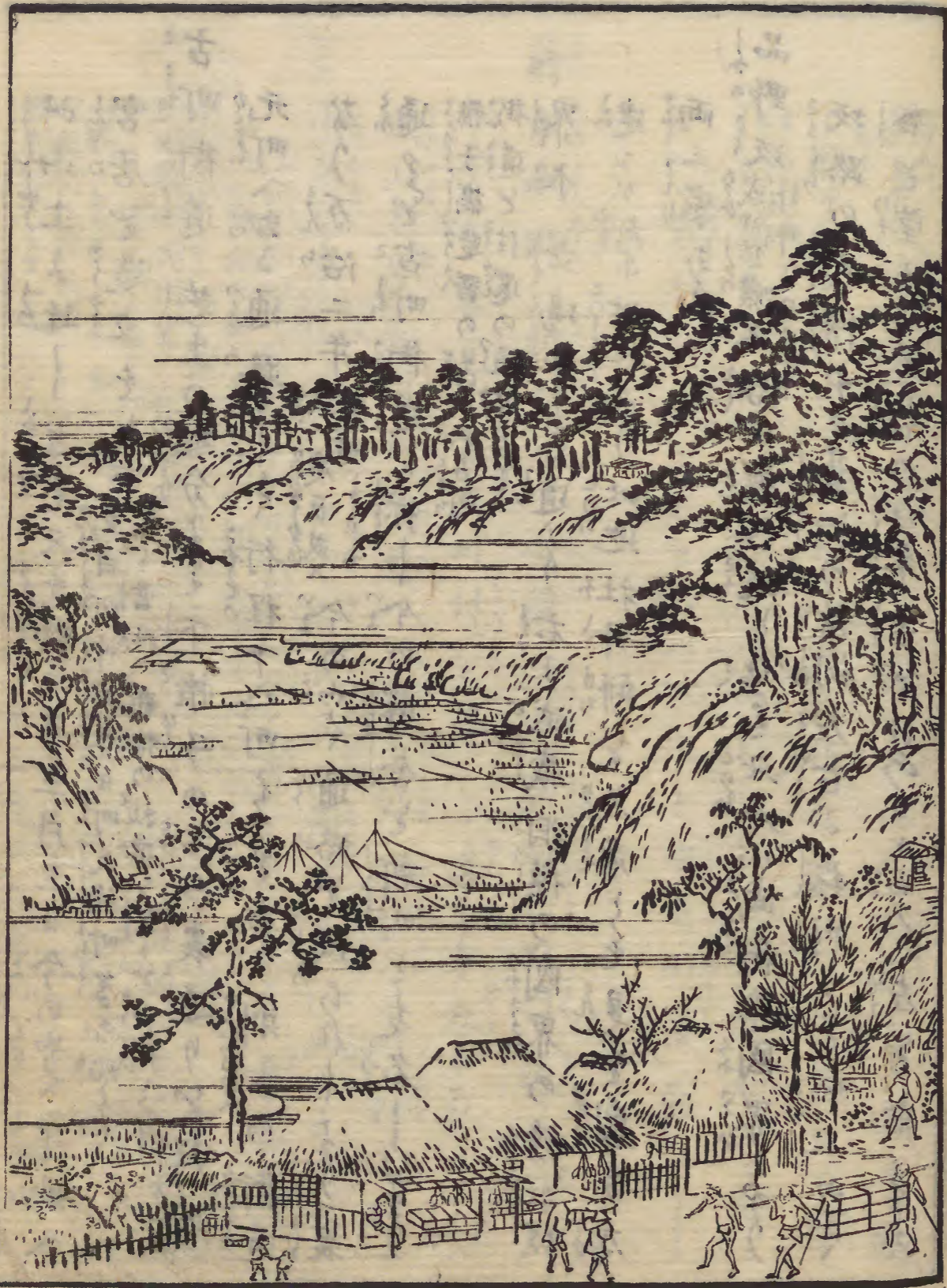


平安記行
 帷子里
 神戶村
 神明宮
 日盛々
 旅人の
 汗まふ
 持資
 の里



境木
 主人の称なり
 武蔵相模の
 境あり故に
 傍尔の
 杭を建
 らせし
 此名あり





科濃坂
 権太坂
 とも云

此山上より迂り又元和二年三月三日今のゆく平地へ

宮居と造立もと云見目河神田春日河天神町等の地より

古町街道 芝生の追分より下帷子の右の裏通りを程ヶ谷の

元町へゆる通路中より行程十八町あり則古の街道

なり万治二年或ハ慶長或ハ今のゆく通路を改られしより裏

通と古町街道と称し今の驛舎を新町と名しなり

帷子橋造替の路ハ此古町惟子橋造替の路ハ此古町

界木 立場ゆり道より右は武蔵相模の國界の傍尔城

建より然る此称あり此地牡丹餅を名産とを是を製する店

両三家あり

品野坂或ハ信濃又俗に権太坂と号し此地ハ武相の國界あり

坂路の両傍ゆを蒼松の老樹左右は森列とを坂上ゆり

右と望めハ芙蓉の白峯玉をけりるゆく左を顧むる

鎌倉の遠山翠黛濃中より実よ此地の風光まき一奇觀

と称す春日山日記に謙信鎌倉鶴岡社恭乃節

江田稻毛小机小杉権現山品野坂杯云海道筋あり

この岩を討敗とありハ此地ゆを中世小墨ゆり

蔭田城跡 新町より金澤通道蔭田村の内蔭田橋と

ゆり東南の方五町計と隔て道より左より土人ハ

城山と号く封域東南ハ一町半計南北ハ二町餘あり

小丘なり郡ハ久良岐往古吉良左兵衛佐義門此地に住す

と云小田原記ハ永祿十年武田信玄小田原を襲んとす条下ハ王子筋へ信玄

神大寺左兵衛佐居住なり左兵衛佐其項大橋城守康忠北見關加賀守滿頼相

人教もあられ多目周防守より其項青木と其妻ハ蔭田あり折前

此妻女の宅と焼く多目周防守より其項青木と其妻ハ蔭田あり折前

抑云同心とを連れて蔭田を守護しる輕部豊前守泰則より蔭田



兼蓮寺
二位禪尼影堂
住吉明神社



青木明神社



ありてハ各吉良のヤシきの前ある山小のりて鑿池とありけりハ敵と
来りてとあり

二位 禪尼 影堂

井戸ヶ谷村 東蓮寺といふ

西光山と号し古義真言宗石川室生寺に傳す

二年末章とあり慶安 真言宗の境内佛殿の側あり相傳ふ此
地ハ禪尼今領の地やニ公の生前自影堂 尼公の肖像ハ

等身あり四十計の繪やと建く東蓮寺と号せし其後度々
右の念珠と持しと秀譽法印勸進の功を慕ふ寛永
兵乱の為ニ破壊せしと

十年癸酉影堂と再興せしものありハ梁牌 鎌倉志如實妙觀と

書く牌あり二位尼の銘ニ詳なるを其左

梁牌銘曰 尼者北條四郎時政卿息女則右大将家北方

二位 實朝 西年 七月 依三 朝公 逝去 後經 二十 六年
賴家 實朝 西年 七月 依三 朝公 逝去 後經 二十 六年
嘉祿 元年 西年 七月 依三 朝公 逝去 後經 二十 六年
將軍 是也 井土 谷 卿 依三 朝公 逝去 後經 二十 六年
將軍 是也 井土 谷 卿 依三 朝公 逝去 後經 二十 六年
乘蓮 寺也 雖立 者也 兵乱 破滅 今秀 譽法 印廢 堂号
他力 雖立 者也 兵乱 破滅 今秀 譽法 印廢 堂号
辨依 鎌倉 二位 尼御 影堂 一宇 國土 安全 求願 成



弘明寺



神明宮



鯨鐘 堂前右の方坂の上より鐘の聲を聞かぬ九年九月廿五日鐘の石の中て願主
 法印長慶と名を注せり今の鐘は寛政十年改鑄せり

七ツ石 若神變奇異の靈石なり自ら現れ自没する恒に其在所と云ふ
 然るに林藪金錢等漏るる輻輳なり頻年御堂の再堂と云ふ

同御禮家の庭中より寺僧喜しく當寺境内に安んずる靈石の徳
 後々不日工面の資財と爲り果てて明和三年造堂の功と云ふ

二王門 石階の下あり金剛密迹の兩像ハ運慶の作り各九尺餘その
 小田原北条家制札 永禄十年丁卯十月二日 石卷彦六郎とあり

同寺領寄附證文 天文二年癸巳二月十八日 石卷勘解由左衛門とあり

本尊縁起曰人皇四十五代 聖武天皇の御宇行基大士東國
 遊化の頃此地に至りてその空中小白蓮乱飛りて山上より

散墜を大士怪むて山に登りて果てて神人の身なり一
 白狐を乗し一ハ靈鳥を乗せ 今境内は鎮座の熊野各大士より

告て曰く去る養老年間印度の善哉畏三藏遠く我

告て曰く去る養老年間印度の善哉畏三藏遠く我





杉田村
海鼠製



日本の土小渡も密教の機縁を要むと云々終此地小来を
 心と止めと七箇の幡石と加持し又其石小陀羅尼と
 書寫し此山小鎮く結界しぬと云訖て其方をと云ひ
 又ふ於く大士善無畏の素懐と鑑しと云ひ十一面の尊像一軀を
 彫り又弘仁年間弘法大師此地小錫を飛し
 無畏三藏の眷と興し行基大士の跡を継ぎ大悲者淨
 刹と靱あ伽藍安鎮の爲め四臂の不動尊像作を
 密教獲神の法樂を般若心徑を書写人法繁榮の
 爲め一千座の護摩と修し且大黑愛深此字の宝塔
 一基是皆大師の製し多の遥の後長曆の頃武相の
 間疫癘流行し人民大小是と患ふ時小當寺中興光慧
 阿闍梨本小新是此疫災と除滅せと云く
 澤此地ハ六浦莊の内なり吉田兼好法師也此地小住れ
 金澤

家集よえとり竟惠法師の北國紀行也神異
 絶妙の勝地なりと稱せれとり往古巨勢金岡此地の勝
 景を摸し畫むと及つと筆と投し嘆賞を大明
 心越禪師ハ其佳景西湖小似とと其八勝小准疑
 八詠の詩賦あり

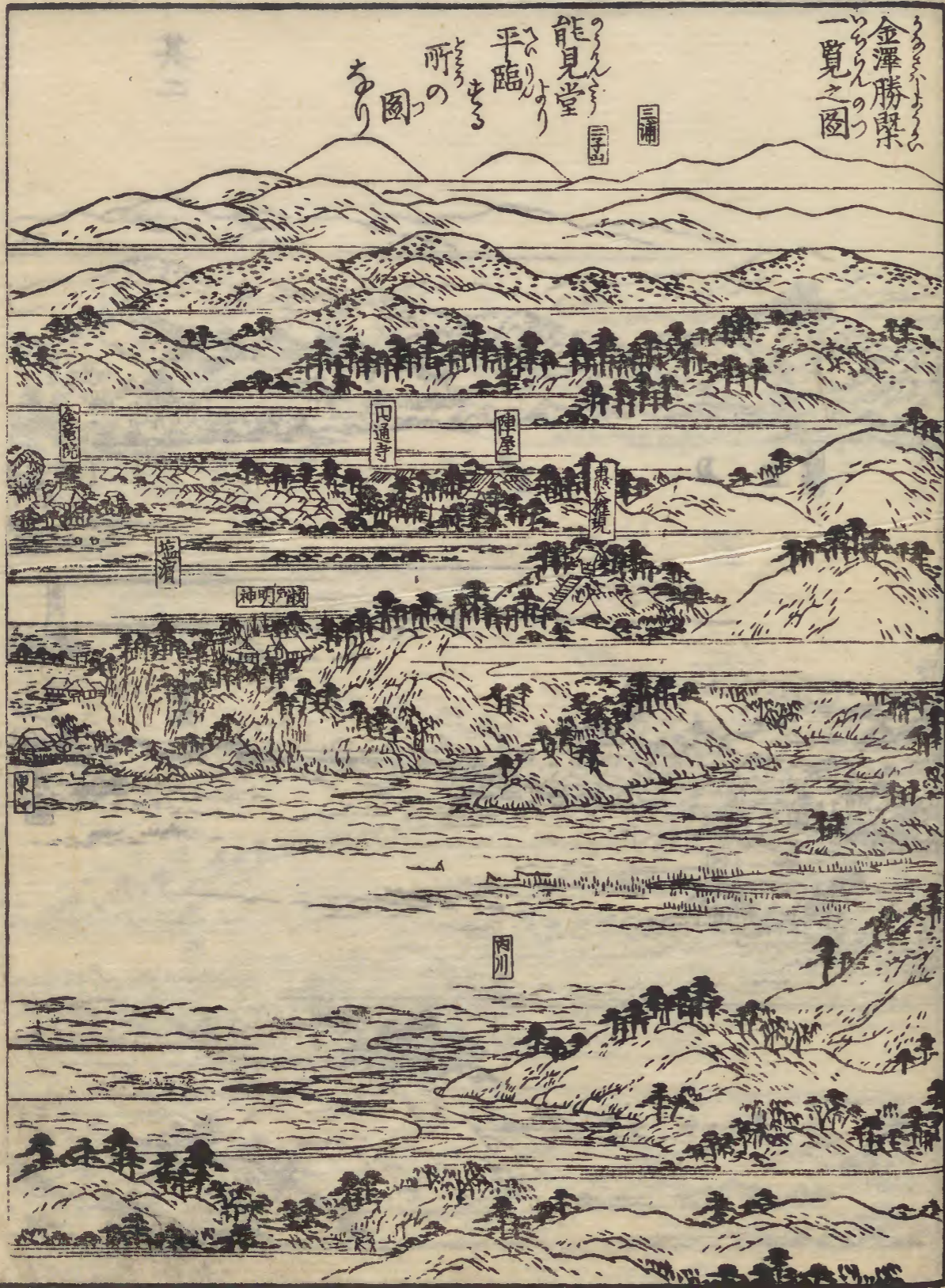
泊々洲崎晴嵐静悄行雲流水自依依狂波遠竹扉市後日斜人
 清瀨消々秋月不繫舟風傳虚籟心中秋廣寒桂子香
 飄處共看水輪島際浮暮雨淒涼夢亦驚甘泉洞々聽分明蓬窓掩蹇無
 相識賜断君山鐵笛聲朝雲外宗萬帆連天無恙輕帆掛日邊款乃高歌落
 雲外宗萬帆連天無恙輕帆掛日邊款乃高歌落
 生風稱名依萬遠連天無恙輕帆掛日邊款乃高歌落
 平悟一名藍成覺地華鐘晚扣若鯨音幽明聞者咸
 瀉落雁迷離祇樹木

涼
如
折
是
筆
擲
松
西山
宗固



能見堂
擲筆松
此所あり
金澤の勝
聚を平臨
まき園ハ
わけ
挙り





金澤勝景
一覽之圖

能見堂
平臨
所の
あり

列陣冲冥堪入塞菰蘆蕭瑟幾成隊飛鳴宿食恁
棲逢千里傳書誰不愛
廣内川幕雪沒潛奇花六出以鋪練渾然王砌山
河色遍覆危峯露些尖
獨羨漁翁是作家持竿盪漿日西斜網得魚來沾
酒飲披蓑高臥仕堪誇
武州金澤擲筆山能見堂有蒲相八景之風味因觀
鎌倉志甚詳一夕寥寥對青燈漫賦八景之陋句以
識斯勝境云歲執徐夏日
東阜越杜多州

能見堂 金澤稱名寺の良の山上よりく 禪宗 新の草庵あり
本寺の地蔵井ハ惠心僧都の作也一寸八分有りと云
後世立像二尺五寸計の地蔵菩薩と作もく靈像をハ
其胎中より云故に此草庵を地蔵院と号く冷の
近世久世和州侯源廣之建立ありてを擲筆山及び
能見堂の二つの額を共心越禪師の書なり
巨勢金岡なるもの其真景を写さんと筆比及ハるべ





以絶倒いぜつたうのつげん堂つげんどうと云と梅花無盡蔵めいげは無じんざう濃見のうけん
堂どうの作るつく或人云此地あるひと云此地より望めハ瀬戸せとの八勝はつしょうもく皆能見みなみ

故ゆゑ能見道のうけんどうと云とつげん堂つげんどうの松まつと云いふ立たよりより金澤かみさわと云いふ下くだせを
澤庵ざえん和尚おしょうのううりり記きりり能見堂のうけんどうの松まつと云いふ立たよりより金澤かみさわと云いふ下くだせを
詞ことば中なか及およぶぶと記きされされるる地蔵ぢざうと木きと云いふ六道りくどう能化のうけの意い小
擲ちやく筆ふで松まつ堂どう前まへに存ぞん在ざいるる大松おほいまつと云いふ巨勢こせ金岡かみおか此地このちの勝景しょうけい筆ふでと
梅花無盡蔵 出金澤いでかみさわ七八里しちぱちり許攀最高頂こころい則山々すなはちやま
水々面々之佳致みづあはれ昔畫師むかしゑし金岡かみおか絶例ぜつれい擲筆ちやくふで之趣のそ有
名無基なむき但其名たがひ不甚佳おほ相傳あひた曰濃見堂いひにのうけんどう也中畧なかりやく又
云畫師擲筆之いふゑしちやくふで云云いふいふ 萬里居士まんりこし

登々とくと匍匐ぼふく路攀高ろばんたか 景集大成けいしゅうたいせい忘却わくご却勞せつらう
秀水奇山しゅうすいきざん雲不哀うんふあ 畫師絶倒ゑしぜつたう擲秋毫ちやくしゅうご
源げん一いつ松しょうはと筆ふで擲ちやく松しょう 西山にしやん宗因そういん
此地このちに至いたるる金澤かみさわの勝景しょうけいを望めハ畫ゑハはく南みなみより西にし

北よめろりくハ皆山中東ハ滄溟に連る千里の風光
窮りなく沖舟の真帆片帆ハ雲小入るとあ中一海
瀬戸の神祠ハ水に臨み称名の佛閣ハ山小傍り漁家
氏屋ハ樹間くくふくく島嶼ハ波間くくにあ
る又瀬戸の烟潮水の盈虚も皆此擲筆松の下に平臨
せよ不中一瞬に遮る一日早晩の異なる一年春夏
秋冬の変わる千態万状極りなく開左の一勝地あり
あつと松島象潟の風致ありを以雅客遊人留連時と
移せりとも其十と一と究る能はる

金澤山稱名寺 町屋村にあり 弥勒院と号し真言律に

南都の西大寺に属す當寺ハ龜山帝の勅願所なり

北条越後守平實時の本願其子顯時の建立なり 實時と

法名と慧時と号す靈牌ハ弘安三年三月二十八日に卒せり

本尊弥勒菩薩ハ唐佛なり立像五尺五寸あり傍に運慶

の作の地藏菩薩の本像二軀を安んず開山ハ審海和尚と号す

小田原北条家分限限ハ金澤稱名寺領金澤に伏せり又氏綱の三男

兼壽王所領の内ハ金澤稱名寺分限とあり地を注し加へり

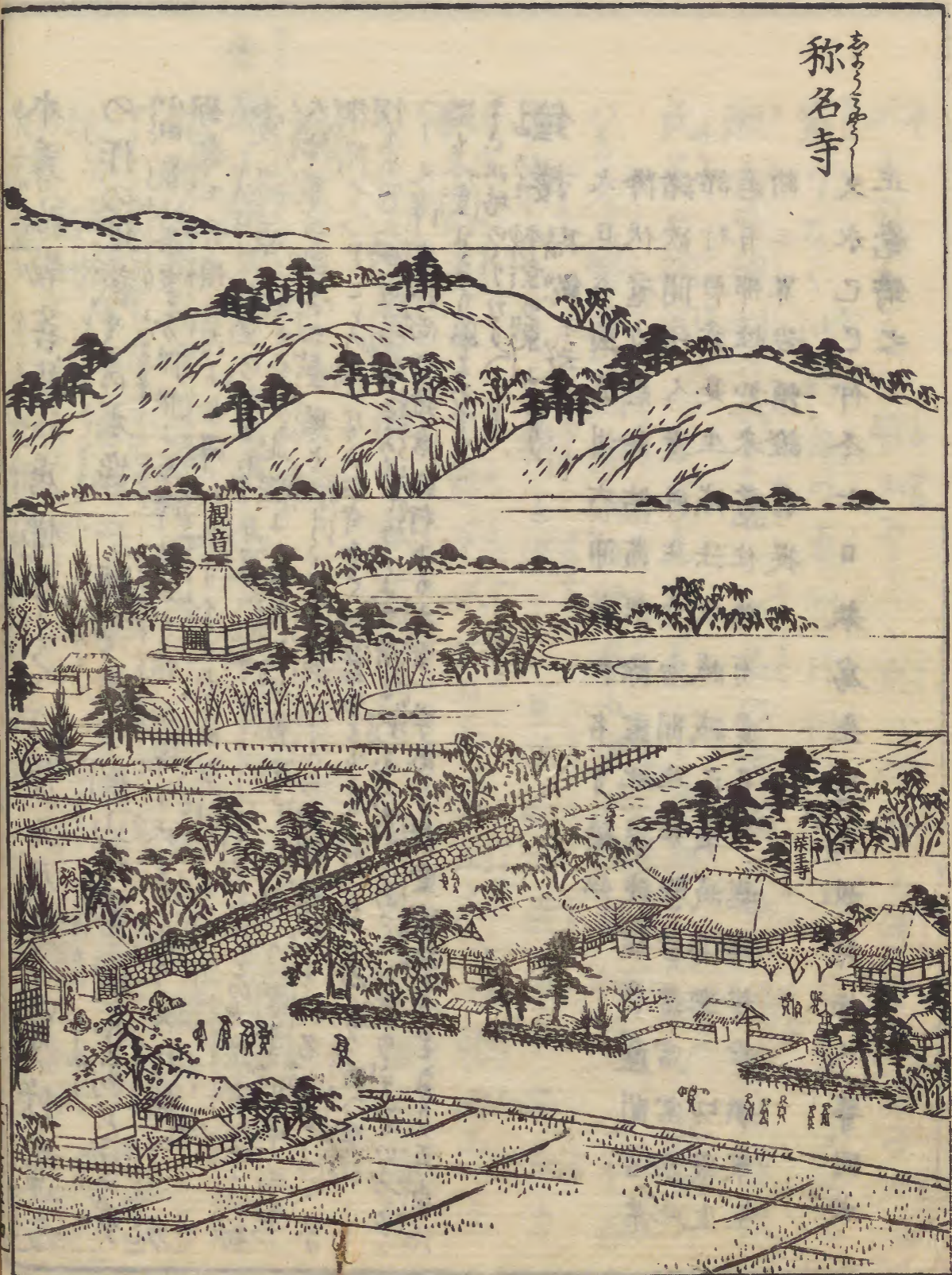
愛凍堂 本堂の西にあり本堂に一切経を収蔵す三寸ありとの鎌倉志ハ弥勒

大結界の図ハ三重塔と注し道興北后の回國雜記ハ稱名寺と

又澤庵和尚の鎌倉記行中本堂一字あり諸堂皆跡をとり五重

鐘樓 本堂の東にあり其銘ハ云く

大日本國武州六浦莊稱名寺鐘銘
降伏魔力怨除結盡無餘露地擊捷槌菩薩聞當集
諸欲聞法人生滅法生滅聞此妙響為樂一切衆生
諸行無常是生滅法生滅聞此妙響為樂一切衆生
悉有佛性如來常住無有衰易一聽鐘聲當願衆生
斷三界苦頌證菩提無有衰易一聽鐘聲當願衆生
文永己巳仲冬七日奉為先考先妣結縁人等同成
正覺鑄之



寺
名
稱
名
寺



其二



金澤頭時墓



金澤貞頭墓

大檀那越後守平朝臣實時實泰谷禪尼

宋小比丘 慈洪書

改鑄鐘銘并序
 此鐘成乎永曆
 力非募士女更
 伏乞先考超三
 於光世音暨乎
 洪鐘之起其始
 質備九乳形象
 三朝之夕趣無
 之朝之夕趣無
 正安辛丑仲秋九日

大檀那越後守平朝臣實時
 法名慧日當寺住持沙門審海行事比丘源阿大工
 大和權守物部國光山城權守同依光

金澤頭時墓
 同貞頭墓
當寺大檀那阿弥院後の山の平腹あり
 高七尺餘石の五輪の石塔あり
 同所あり頭時の子なり石塔あり
 五輪あり高七尺餘石の五輪の石塔あり

美女石 瑤石 四石と稱するもの 其一は 西中橋より西にあり 金澤
青葉楓樹 納堂の前 鐘樓の傍にあり 舊樹に枯る 今新本を栽り
金澤八木と稱するもの一あり 謝野が是を作ると

北國記行 金澤より西にあり 稱名するもの 一あり 林のあり
むら 爲相殿の

つわいひ一本は時を自らむのふささきなり 巻のふらふ
とけりしありしは本もあて 言ふまじもはさし
突ゆる楓樹のころり 佛殿の影ふささし

東國記行

つわいひ一本は時を自らむのふささきなり 巻のふらふ
とけりしありしは本もあて 言ふまじもはさし
突ゆる楓樹のころり 佛殿の影ふささし

宗牧

つわいひ一本は時を自らむのふささきなり 巻のふらふ
とけりしありしは本もあて 言ふまじもはさし
突ゆる楓樹のころり 佛殿の影ふささし

鎌倉記行

秋のつとまきあふ白みむら 乃 あり
池のちりり一本のふささきあり 乃 あり
つわいひ一本のふささきあり 乃 あり
つわいひ一本のふささきあり 乃 あり

全

澤庵

西湖 梅 鐘樓の影ふささし 八木の其一なり

梅

花無盡藏 日 貼 西 湖 梅 詩 序 律 寺 支 那 之 名 産 也
丙午 遺恨 富士 則 入 相 貼 西 湖 梅 詩 序 律 寺 支 那 之 名 産 也
為 遺恨 富士 則 入 相 貼 西 湖 梅 詩 序 律 寺 支 那 之 名 産 也
唯 見 蓓 蕾 而 雖 未 見 其 花 豈 非 東 遊 第 一 之 奇 觀 乎
哉 金 澤 於 稱 蓋 先 而 雖 未 見 其 花 豈 非 東 遊 第 一 之 奇 觀 乎
梅 花 招 提 遊 名 庭 背 以 西 湖 呼 之 余 作 詩 云 前 朝 湖 金
澤 古 翠 禽 啼 十 年 餘 雖 未 盡 福 山 有 識 面 枝 未 開
遺 恨 其 花 數 十 片 爲 一 包 春 澤 見 惠 翁 己 酉 夏 余 措 飯 之
春 摘 廬 奉 獻 而 見 之 則 於 心 翁 之 借 余 手 趙 昌 枝 濃
之 舊 廬 奉 獻 而 見 之 則 於 心 翁 之 借 余 手 趙 昌 枝 濃
條 貼 其 花 近 於 春 翁 之 則 於 心 翁 之 借 余 手 趙 昌 枝 濃
所 貼 其 花 近 於 春 翁 之 則 於 心 翁 之 借 余 手 趙 昌 枝 濃
觀 焉 之 次 要 作 於 春 翁 之 則 於 心 翁 之 借 余 手 趙 昌 枝 濃

六浦秘法日荷上人
 称名寺の住僧と
 戯小碁と圍小碁
 寺の二王と
 賭物と
 上人勝り
 うれい終ふ
 これを負く
 甲州身延
 山へ至られ
 うりーと云
 大力無双の人



前朝金澤古招提
 梅有西湖指枝拜
 遊十年遲雖莖臍
 未開遺恨翠禽帝
 一横枝上粘西湖
 名字斯花別不呼
 意外春風真假合
 傍人定道昼成圖

櫻梅 同所あり花ハ重辨
 文珠櫻 同所あり普賢象
 今ハ荒廢せり澤庵和尚の鎌倉紀行ありての室との書せし額を揚ぐ
 声のどろもと坐禪觀法の床をあらわす
 頃ハ荒廢せり
 阿弥陀院 本堂より左山の傍あり
 運慶の作あり此二像ハ杉田村東禪寺とありて
 回ノ二王なるハ六浦の荒井平次郎光吉出家
 称名寺の住僧と碁と圍と二王と賭と終ハ日荷上人勝り
 二王の像をぬく身延山へ送られ六浦上行寺に其二王の像の玉眼
 なりと称する五寸ありの玉と傳へり

熊野新宮 此の西岡の上あり
 寺寶佛舍利 祖相兼の舍利と号し
 龜山帝の執に

當寺へ後納り納り昔ハ
 勅封ありしと云り
 彌勒佛泥塑像
 長三寸座像
 弘法大師の作り
 愛深明王金銅像
 龜山帝の御念持佛
 請雨經瑜伽論
 共ニ菅丞相の真跡の瑜伽論ハ長二寸五分一行ハ二十五字あり此論ハ一部百卷
 紀州高野の金剛三昧院ハ一巻江州作生島ハ一巻以上合せ八巻ハ今神前ニ存
 杖舉と云ふ違あり

大界外相圖
 元亨三年當寺結界の図なり其光景尤大廈高堂小
 元亨三年癸亥二月廿四日
 羯摩師極樂寺長老忍公大德
 答法多宝寺長老俊海律師
 港 睿

當寺本願越後守實時及ひ顯時貞時貞將等の西像の
 懸幅あり

揚貴妃玉簾一連
 初尾州熱田ありしと龜山帝の勅あり當寺ハ
 梅花無盡藏曰 金澤稱名律寺間 西湖梅以未開爲
 遺恨矣珠簾猫兒支竺群書之目錄無介者而不能
 融目云云
 注曰稱名寺水晶簾唐猫見之孫 大時敬及郡書

蓋先代貯焉
 又曰寺祕件々之物容易元使人看之也

回國雜記
 卷の長さ三尺四寸ひろく四尺半あり水精の
 如きのものあり花幅ふくむとてさき
 中りたれハおの感緒を交れず
 地を傳へていふ

北條陸奥守制札
 道與 推后

全澤阿弥陀堂稱名寺領敷地并垣場等事
 右於當所軍勢并甲乙人等不の致咎妨狼藉若於
 令遠犯軍着為被處罪科之被注申交名々状依仰
 執達如件

康安二年五月廿四日
 陸奥守 廼

永享十一年稱名寺領結解狀
 註進

稱名寺領赤岩十四ヶ村御年貢錢永寛結解状事
合八十貫文内

六十九貫六百文 寺納

八貫文 代官給

一貫文 德妙衣料

八百文 夫領路錢而度四人分
年貢運上時

三百文 今津問方酒直

三百文 六浦六郎方礼儀替錢之時

己上八十貫文

右所勘定状如件

永享十一年三月三日 政所憲意判

當寺北条家繁昌の昔巨藍なる巨藍なりとも物換り
星移り堂宇多く破壊し今山圍古木聳え松杉

梢とありそひ常小鬱くあり房宇もえり寂莫の

扉と閉ち座禪觀法の床とありに似る東野文集に寺前の
土庫文庫の称茂

金澤文庫舊址 阿弥陀院の後の畠と云

冒と相傳北條越後守平顯時宮建もわや内に

和漢の羣書と納め儒書や墨印佛書ハ朱印を用也

印文ハ楷字ゆゑ堅よ金澤文庫の四字と注す印章の
摸形を

吹後上杉安房守憲實執事より時再興せり

其後ハ荒廢し書籍散失せり内辰紀に越後守
清原の教隆は群書治要を讀せり余は後朝文選清原の師光左傳教隆の

群書治要存民要術律令義解本朝文粹續本朝文粹續日本紀をのこす
其外人家よりあり一部と云ひ見記云金澤文庫内は左傳の卷本三十卷
中原師光の跋ありと云り鎌倉志一切経の切残りとの弥勒堂ありと云

印面大サ 共如圖

金澤文庫



鎌倉大草紙云武州金澤の学校ハ北条九代の繁昌此
昔学問あり一旧跡なり是を今度彼文庫を再建
しく種々書籍を入置又上州ハ上杉々分國ありこれハ
足利ハ京并鎌倉ハ名字の地あり他ハ異なりや彼
足利の学校を建立しく種々の文書と異國あり求め
納る此足利の学校ハ上代義和六年ハ小野篁上野
の國司より一時建立の所同九年篁陸奥守ありて
下向の時此ハ学校を建てる由其旧跡今残り
るを應仁元年長尾景久ハ沙汰とて政所より
今の所へ移る建立する近代の岡山ハ快元と中禪
僧なり今度安房守公方ハ名字掛の地あれハとて
学領を寄進一弥書籍を納め生徒を憐愍せしハ
此項ハ諸國大にても学道絶るハ此所日本

一所の学校とある是より猶以て上杉安房守憲実と
諸國の人をほめたるハ西國北國よりも生徒悉く
集ると云く

觀金澤藏書而作
玉帳修文講武餘
牙籤映日窺蚪
圮上一編看不足
照心古教君家有
遺人來見舊藏書
縹快來晴走蠹魚
鄰侯三万欲何如
收在胸中歷五車

慕景集
二月將茶金澤の文庫ゆく
日向の勝元の神よりやこれハ隣家梅花
とりの人跡をを供りてて遺る

丙辰記行
懷古淚痕羈旅情
人亡書泯幾回歲
府儒早晚起蒼生
境致空留金澤名
御所ハ谷阿弥陀院の後の切通とゆる島と云里俗云く
龜山帝の行宮の跡なりと
道通ハ則所恭請の鎌倉志り

此帝勝地佳境へ遊歴のりあはれとも此地へ御幸のりあ

舊紀よ見えすりと

魚好法師閑居旧跡 其地今あへりしす

魚好家集 武秀園室住といふ昔住居の跡のり

右御の御寄跡をのりあはれとも此地へ御幸のりあ

藥王寺 三療山と号し称名寺の前道より左側よあり古義の

真言宗より龍華寺よ属を本堂ハ胎藏界の大日如来

の座像三尺あり當寺よ蒲御曹司範頼卿乃

靈牌あり表ハ大寧寺道悟裏ハ天文九年庚子六月

十三日と記し由鎌倉志よ物とありとも今その牌

あるりし

藥師堂 本堂の前右の方より廊をめぐり本堂藥師佛の像殿ハ十二神の

御寄跡をのりあはれとも此地へ御幸のりあ

天然寺 法爾山と号し同所藥王寺より九丁ありを隔

て瀬戸街道より野島へ砂道の左側よあり浄土宗の

座像あり一尺五寸計あり作者あへりし

鎌倉の光明寺よ属せり本堂阿弥陀如来の木佛ハ

禪方和尚と号し永祿二年二月 寺宝ハ弘法大師及ひ惠心僧都

等の畫り佛像四五幅あり

龍華寺 知足山弥勒院と号し天然寺より五六町南の方瀬戸

街道洲崎村と町屋村の間道より左側より古義の

真言宗の檀林あり御室仁和寺の末

本尊大日如来ハ座像二尺餘り右ハ弥勒佛の本像を安

す共よ作者を志し左ハ安置の不動尊より行基大士の

作あり 立像 二尺斗 太田道灌入道寄附と云閑山ハ法印

のりあはれとも此地へ御幸のりあ



町屋村
龍華寺



融辨と号
鐘樓 其堂前左の方にあり

大日本國武州六浦庄金澤郷 知足山龍華寺

唱鐘知識文 夫滄海者鱗甲所潛 念塵所浴靈鐘者苦類 留名王之望劍兼亦歟 所息然則洪鐘隆鼓焉 但

菩薩勝慧者 乃至盡生 死 恆作衆生 利 而不及諸槃 一般善及 方使 智度悉加 持 諸法及諸有 一頂切皆 清淨 諸伏盡諸 有 不蓮體本 故有 不爲垢所 染 諸性亦 然 如得淨除 故有 不爲垢所 染 諸性亦 然 不衆得自 在 能大欲得 清淨 大安樂 富饒 三尊聰陀羅 尼 隨求陀羅 尼 光明真言

天文十年辛丑五月五日
當寺住法印推大僧都善融
檀那古尾谷中務少輔平重長
道傳

寺寶兩界曼荼羅 涅槃像 筆者詳あり

像 一幅弘法大師或ハ願行 十三佛補像 一幅中將如の 不動畫像

五指量愛赤明王像 弘法大師の作と云 鈴 一箇弘法大師の持物

鳳凰頭 二箇龍頭 以上金の箔と貼り 灌頂の時幡と掛る具あり

當寺ハ治承年間鎌倉右府頼朝公伊豆國三島明神と

金澤瀬戸の地小勸請あり 後法味を進むる為

文覚上人と共に志と合せ 文治年間六連の山中に精舎を

創建せし 弥勒菩薩の像と安んず 都卒の四十九院よ

準凝し 四方に六八の僧坊を建 浄願寺と号 庄園若干

と寄らる 當寺廻り 往古弘法大師獲摩修り 然し 殿堂

甍を並へ粉壁 八月の光を移せ 伽藍ハ博敞あり 丹柱あり

星の林となせり 平後正嘉年間南都の恩性律師當山小

住し戒律を弘め弘長二年中を東寺の能禪法印當寺に
於く灌頂を修りせしむ。印融僧都の附屬に依りて光徳寺を
兼帯せしむ。此寺も頼朝公の建立なり。真言の靈區あり。高野山
無量光院印融東遊の初。此寺に住親筆の書籍文庫あり。
荒廢せしむ。明應八年融辨師大永四年甲申八月
朝日殿八十二歳深く是を愁へ
本尊の眞助を願われし。菅原朝臣中務丞資方力と合せ
伽藍再興と企む。時小本多弥勒大士夢中辨師に告
めり。是より良に當く末世有縁の勝區あり。彼所へ移
し。三密の法燈を挑へし。夢覺く後。其處を窺はる。竜
燈の奇瑞あり。洲崎村の境なり。堂前は教圓の
松あり。竜燈の松と号。今ハ枯る。竟に辨師
本尊の靈ルに任せ。此地に至り。二町四方に結界し。兼帯
せしむ。浄願寺光徳寺兩院の僧坊を合せ。一寺と爲し。
後土御門院の勅と奉り。知足山龍華寺と号。師資相

傳の本多聖教を納め。善融法印に附屬を。此師相州小田
原の城主大森の
末子なり。龍王丸と号。弁師の徳を慕ひ。浄願寺に入。僧と爲る。其營
世に隠れ。依りて北条左京大夫永樂錢七貫文并柴村權現堂山を寄附
せしむ。享祿五年小東寺の寶菩提院亮惠僧正を請し。傳法
灌頂を受。天文十二年古尾谷中務少輔平重長を檀越と
し。洪鐘を改鑄せし。後太田道灌不動尊の靈像を寄
附し。武運延長を祈り。此不動尊の像ハ
追福を求る。天正十九年。御開國の後當寺を御修
營りし。御朱印を下し。あひし。り。四海泰平に祈念
怠りし。なり。
當寺ハ真言古義檀林一宗の本寺なり。金澤小甲より
境内に古木聳え。覺樹の粧ひと示し。緑竹翠の色を
なす。實相不變の容を頭も海水左右に湛く。朝鳥夕鬼の
影を浮へ。人家前後に列く。山市漁村の觀をなせり。二十

浦の郷



鎌倉記行

新夕下流

よき

事好

烏帽子

島

沖より

あき

風好

よき

洋港和尚



有餘の未寺ハ林邑ニ散在シテ年々の法會月々の勤修
恒例ニ任セテ怠ルミナク寶祚の長久武運の萬歲茂
祈ミテ暁の振鈴の声ハ無明煩惱の眠を覺シ夕比
梵鐘の響きキテ三途の迷夢を破ル實ニ江南の一精舎トシ
善應寺野島山ト号シ同所ヨリ半道シテ鹽濱と隔テ南の
方野島ニ傍テあり真言古義ノ龍華寺ニ属セ本尊
不動明王の像ヲ作者トスルハ正觀音の本像ハ立像ニ尺半
ありテ聖徳太子の作ナリ愛深明王ハ座像一尺五寸ナリ
ナリ弘法大師の作ト云此像の胎中ニ愛深明王の小像
ナリ體ト作テ籠ラシメテあり
野島同所東の出崎中ニ瀨戸橋ハ七八町あり土人
百軒島トモ云民家百軒あり餘リ時ハ必災あり餘ノ百軒島ト
呼ビテ此所の出崎ニ紀州亞相頼宣卿の山の出崎ニ稻荷の
鹽尻呂の舊地ありトナリ
小祠あり又中腹中ニ菅神の宮あり此地の北ニ平方ト
シ町屋村の東ト金澤原トシ此地の東北海濱トシ
鞆の浦ト稱セシ

鎌倉記行

岩のありてふもくひりく自々橋を跨
汀とありてふもくひりく自々橋を跨

為の秋と云ひあせくありたり北西の多れを松乃之

澤庵

野島渡一野島ト南の方室木村ハ入渡一ノ舟路
一町餘ニあり江戸ヨリ浦賀ハの近道ナリ

洲崎野島の西瀨戸橋の東北漁村を云鎌倉志ニ云太平
記及び鎌倉年中行事等の書ニ洲崎トありテ鎌倉山
内の西ニあり洲崎村の南中ニ此地ありテ見

瀨戸或ハ迫門洲崎ト引越村との間を云

四國雜記 瀨戸を海とシテ街地のまを云



旅亭
東屋



其二



瀬戸の沖は海ありてくさくさ

ふらんがたのたさしうが波あつた瀬戸の汐合波はあ人

道真 推后

磯山傳ひつりしものちんあつりしれ

あつた瀬戸の海は波あつてあつりしものち

瀬戸橋 同一入江に架せ中間に臺を儲け橋杭を用ひし

しと長と二間ありし此橋二川を渡しし

迫門の明神とく入海よさし山あり古木野と麓に橋あり橋の下あり
潮入りぬれは遠く速き山の興まく湖氷とあり潮引ぬれは水鳥も陸り
まゝみわを水陸の景氣も朝夕よまゝり金岡も筆おろそりしとあり云

照天姫松 同所北の方西の出崎にあり延寶庚申の大風小

吹折らるゝり連一株の松の根株のしと存せり里彦り

云く照天姫燒の為小燻られしと燒り燒しりの松と

りしと

鎌倉大草紙云 應永三十年癸卯春陽より常陸國住人

小栗孫五郎平尚重と云者ありし謀反を起し鎌倉小

背さるれハ源持氏結城の城へ勅座ありし同八月

二日あり小栗を攻らる終小栗忍ひく三州へ落しる

とある条下よ云今度小栗忍ひく三州へ落しる其子

小次郎忍しる小忍ひく關東よあつりし相州権現堂

と云ふ移りし其邊の強盗を集りしに宿哉

かりしれハ主の中ハ此浪人を常州有徳仁の福者の由

聞く定く隨身の實あつて打殺しと取らる由

終合を乍去健なる家人せありぬ何せん云一人は

盗賊中を酒よ毒を入吞せ殺せし人先と同一宿の

遊女せを集今様を唄ひせ踊舞戯れる彼小栗城

馳走の醉ふと酒をもちり酒をもちり夜酌よ立り

照姫と云遊女此間小栗に逢馴此ありしを以し

瀬戸明神社

法身妙應本無方
三島不阻一封疆
山色涵波顯無跡
朝陽出海是和光
沢庵



酒を自ら此酒を呑ましめありける小栗とありれども
由を私言々間小栗も呑様ふとてか酒を更も呑さ
るる家人を知らず何れも解伏せり小栗ハ夜初め
解ゆる林の有る間へゆく見られハ林の内小鹿毛か
馬を繋ぎ置り此馬ハ盗人共海道中へ出大名往
来の馬を盗り来りとも才一のあつ馬あつ人も馬
とも喰踏られハ盗人共不叶し林の内ハ繋置り
小栗是を聞き密に立歸り財宝少く取持て彼馬ハ
乗鞭をもち後解ゆる小栗ハ毘の馬乗り片時の
間ハ藤澤の道場へ馳上人と頼られハ上人あられ
侍衆二人付り三州へ送らる彼毒酒を呑る家人并
遊女少く解伏せりと川水へ流し沈め財宝をも尋取
小栗をも尋られともなる盗人共ハ夜分散る

酔ふ立る照姫ハ解ゆる解ゆる解ゆる解ゆる解ゆる
酒を吞さりされハ水ハ流れ杉川下よりイハ上りた
る其後永亨の頃小栗三州より来り彼遊女を
か種々の宝と与へ盗人共を尋皆誅罰しり後ハ

三州ハ代々居住せり
鎌倉大草紙より考ふ照天姫ハ照姫のつと云々小栗の名と世
馬氏と称せれとも同書ハ水郎とのありと馬氏と云ふを
小栗系譜と考ふ小栗五郎平重子助重とあり此小栗
今世ハ云傳ふる云ハ此小栗の附倉の流を備り

瀬戸明神社瀬戸橋あり一町半西の方道あり右側あり
祭神大山祇命一座之神主千葉氏奉祀也社傳云
當社ハ右大将頼朝公治兼四年四月八日豆州三島の御神と
勸請なりあり鎌倉年中事あり四月八日瀬戸
三島大明神臨時の祭礼とあり或云往古此神此地へ飛

来りてあふふとも
土人傳へ云今金竜院の庭中飛石と

按は頼朝卿御倉へ入りて治承四年十月六日ありて東鑑に
此年四月八豆州の配所北條の館は六浦社領司の
六浦不審少佐神主とありて田原北條家の分限は六浦社領司の
遊世野人の靴師と云今本社幣殿の内左右は置いと

看督長像

額

山積神宮

世尊寺後二位経尹卿筆

同額裏書曰
延慶四年辛亥四月廿六日戊辰書之

沙弥寂尹

鳥居額 瀬戸明神 神道長正二位卜部 季兼卿筆

鐘樓 社前右の方よりあり

瀬戸三島社鐘銘
洪鐘新製寄器海場電神振徳衆人結縁韻徹遠近
鏗化世俗頌歌夜禪覺煩惑夢驚生死眠昏曉清響

劫々永傳
應安七年四月十五日奉鑄之

普川國師鑄金
室戒寺の鐘也

檀那 勸進 大工 大和権守國盛

薬師堂

本社右よりあり土人
故下僧伊香保の湯は
此瀬戸の三島明神の社前ありて信俊の親の仇と報ひぬる

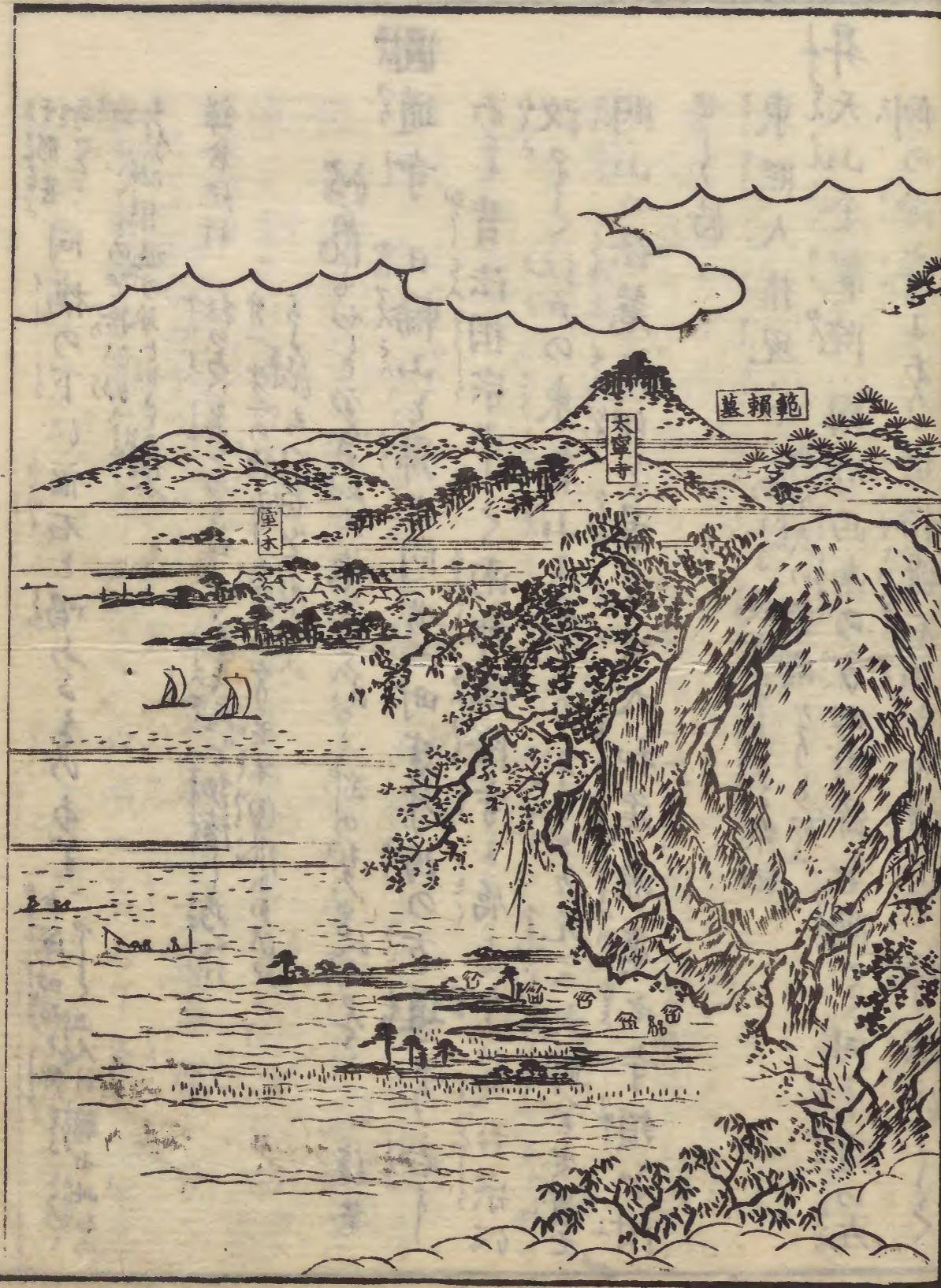
三本杉 延宝庚申の大風より根株相連りて三本ありて生せし

蛇混拍 本社の右の傍ありて是も延宝八年庚申八月六日の暴風より吹倒され

梅花無盡蔵 文明竜集丙午十有八年小春二十

同 瀬戸社 自作之詩抄邊傍点劃不眠如新鑄之云云

瀬戸社 自注云六浦廟前有古拍屈蟠



奇なり 同橋の下に福石と唱ふるものあり 金澤四石と稱す
前中 あり必有福の券とありと云はる 土人の謠ふ此石の

鎌倉記行

社のありありとつとみなりと云ふを 鎌倉の地を歩くと、
社一才二の移ありありのありありなり 木石のありありなり

浮菴 浮菴のありありと云ふは

圓通寺 日輪山と號せ同所二町半 西の方道より右

あり昔法相宗中より南都法隆寺に属せ今八天台宗に

改り江戶の東叡山に属せり本寺を元三大師と安置せ

岡山ハ法慧法印と号久世大和彦源廣之寺領と附

せり

東照大権現宮 山の上は鎮座なり

昇天山金龍院 同所西南の方四町餘と隔て同一道の左

側の海岸にあり世俗飛石山とも呼ぶを禪宗に

鎌倉の建長寺に属せり本寺正觀音座像二尺三寸行基

大士の作なり 鎌倉志に虚空藏菩薩と 方崖元圭和尚を以て

岡山と稱す 和尚ハ俊約翁の法嗣なり

飛石 當寺後園の山の麓にあり 高一丈あり廣九尺七寸

九覽亭跡 同所の山の上あり曲折して登る所の 備あり

八景小能見堂と加へて見るとあり名有り

泥牛庵 金龍院の前路を隔て向側よりあり 禪宗あり

鎌倉圓覺寺に属す本寺ハ七寸計の唐佛の土面觀音の

像と安め此庵の岡祖ハ圓覺寺の傳宗庵南山和尚 講

聖一國師の嗣法なり建武三年 中興ハ習甫玄道座原と号す

當菴の南一町半 山の上古墳二基あり其一ハ海老名

長門守と云ふ人の墓あり此人泥牛菴あり自害し

終つひと云いはするの時とき世よ事實じじつといふ精一いつかす

猶なほ考かんへば後のち海うみ老ふる名な源げん三さん季き貞まこと

荒井あらい妙法みょうぽう日荷にっか上人じゆんじん加持かぢ水みづ同どう所ところ農家のうか金子かねこ氏うぢの地ち存ぞんす

井いと云いはするの味あじ甘あま美うまゆゝ尤なほ靈泉れいせんといふ此所ところの地ち存ぞんす

荒井あらいと稱なづけらるる往古むかし日荷にっか上人じゆんじん荒井あらい平次郎へいじらう光吉みつよしと号なづけらるる

此こゝ地ちは居住くぢゆうせしふりかく呼よまさるるといふ事也なり

能のう仁にん寺じ舊きう跡せき上かみ杉すぎ房ぼう州しゆう太たい守しゆう築きく武ぶ州しゆう金かね澤ざい能のう仁にん寺じ

鎌倉かまくら志し古こ記き曰い上かみ杉すぎ房ぼう州しゆう太たい守しゆう築きく武ぶ州しゆう金かね澤ざい能のう仁にん寺じ

創すゑ七しち宇う伽が藍らん請しん方ほう崖がき和わ尚しやう為ゐ開ひら山さん第だい一いつ世せい辨べん山さん曰い福ふく

壽じゆう跡せき寺じ曰い能のう仁にん太たい守しゆう有あ旨あ隆りゆう能のう仁にん寺じ位ゐ列れつ諸しよ山さん者しや也なり

永えい德とく三さん年ねん小せう春しゆん日にち東とう暉けい曇どん所しよ謹きん記き又また本ほん尊そん建けん立たつ永えい德とく

曇どん所しよ奉ほう行かう德とく慧ゑい德とく澤ざい檀だん那な年ねん四し月げつ廿にじふ一いつ日にち終しゆう住ぢゆう持ぢ東とう暉けい

之これ大だい檀だん那な房ぼう州しゆう道だう合がふ德とく珠しゆ書しよ之これ喜き上かみ總そう州しゆう法ぽう眼がん朝ちゆう榮えい作さく

能のう仁にん寺じ佛ぶつ殿でん梁りやう牌はい銘めい鎌倉かまくら建けん長ちやう寺じの龍りゆう峯ほう庵あん

恭願きんげん皇圖かうと鞏固かうこ而して四し海かい昇しやう平へい黎れい庶しよ安あん寧ねい而して五ご穀こく豐ひやう稔ぜん

檀那だんな前ぜん房ぼう州しゆう太たい守しゆう善ぜん薩さつ戒かい第だい子し道だう合がふ敬けい白はく在ざい伏ふく冀けい佛ぶつ

永えい德とく二に年ねん壬にん戌しゆ四し月げつ日にち開ひら山さん方ほう崖がき元げん圭けい謹きん題だい右みぎ

六浦ろくほ山さん上じやう行かう寺じ泥牛でいご庵あん六ろく七しち町ちやう西南しんなんの方ほう道だう右みぎ側がはに

あの當あた寺じ往古むかしハ真言しんげんの古刹こせつゆゝ六浦ろくほ山さん金かね全ぜん寺じと号なづけらるる

然しかるる應安おうあん年中ねんちゆう北きた住持ぢゆうぢ某なつか日蓮にっぺんの法ぽうをまそと日蓮にっぺん宗しゆうとあり

北きた德とく中ちゆう山さんの日にち祐すけ上じやう人じん閑祖かんそといふ自らの妙法みょうぽう日荷にっか上じやう人じんと号なづけらるる

祖そ師し堂だう宗しゆう祖そ日にち蓮れん大だい士しの像ざうを安やす坐ざ座ざ像ざう二に尺せき三さん寸すん余ああり

祖そ師し木ぼく像ざう胎たい中ちゆう収しゆ蔵ざう法ぽう華け經きやう書しよ寫しやう人じん名な簿ぼ紙しハは用ようのたり

三寸三分さんすんさんぶんの紙し紙しハは用ようのたり

包紫銅ほうしちゆうの徑かう筒とうハは胎たい中ちゆうに収しゆむ徑筒とうハは胎たい中ちゆうに収しゆむ徑筒とうハは胎たい中ちゆうに収しゆむ



六浦
上行寺



八卷小書写の人名簿一卷共小九卷あり其文云く

御身の御經奉書寫之人

一	卷	良圓融律師	日源
二	卷	正範坊	日秀
三	卷	祐奠坊	日正
四	卷	良乾坊	日秀
五	卷	衆寧阿	日秀
六	卷	衆寧阿	日秀
七	卷	衆寧阿	日秀
八	卷	理賢坊	日宣

安立坊の南山

奉造立 右願主 卿公沙門 妙光慈父母

奉讀誦妙法蓮華經五部

良範公 上總公 正府同心久讚

奉各方便賢品十篇宛讀誦之是 自陀羅尼品 自我謁

奉讀誦 十如是 自我謁 題目百廿五

奉唱題目一萬反 日源敬白

御身ノ形相中老日法上人御作也

應永十三年丙戌十月十三日

右六萬恒沙上首上行菩薩此御利益者尔住迹用本
名字初隨有喜形相身任御附屬妙法之要五字弘一
天四海秘法良藥施萬人明廣爰流布因撰純就信
心大施主等之成就所嚴迷者也

釋迦堂 本尊釋迦多寶四菩薩 當寺往昔 眞言宗より

六浦妙法百荷上人石塔 祖師堂と釋迦堂との間 樞の本にあり

上下とも後人造り添へたるものなり 中股の石の横面は延和二年六月
十三日と彫り付あり 妙法蓮華經の卷第六にあり 妙法蓮華經の卷第六にあり
相法俗稱と荒井平次郎光吉と号建長六年甲寅日蓮大士北徳中山にあり
此妙法蓮華經の卷第六にあり 妙法蓮華經の卷第六にあり 妙法蓮華經の卷第六にあり
上人の隨從し出願得度のは妙法と号文和二年癸巳六月十三日示寂を依日荷上と



かろしと生捕く六面の沖は沈みそくけりしとありて異あり
永祿の頃ハ小田原北条此地を領一六浦木曾分の地ハ
武田家へ付一同所大道分の地を龍源軒とす小付一
た由分限帳よりんそとす

澤庵和尚鎌倉記行

あられハ三ヶ日鎌倉へ移り一坪を築ルハ
里ありてあむむははの海とてハまを
こゝハ海王の宮と云ふれありてんそとす

よのよの六浦の海へまの控ハ海のき干沼に 澤庵

海士のまをこれありてんそとす

六浦川 此地の道を横きりて流る小溝を云又此溝は架す

小橋と云六浦橋と号くとす

日光寺の辺より光傳寺の辺迄の地の字を川村と稱し按る昔の水流の
田記なる所ハかくと云ふなりんそとす

日光山専光寺 嶺松寺あり二町計を隔てて南の方道より

右側はあり浄土宗なり同所天然寺は属を木尊十一

面観音ハ立像一尺計あり佛工春日の作なりと云相傳ふ

照天姫の念持佛なり姫松葉わく燻らむ一時身代

り小立と云ふと云傳へり寺の後の方ハ日光権現の宮あり

故小山号とす

油堤 同一寺の後の田圃を隔てて半町を隔て西の方小續き

と山を油堤と云由土人云里 鎌倉志中を傳光寺の 里諺に

照天姫の乳母侍後とすとの姫の粧具を携へ此不逆

尋来をりてと云姫の形方ありと云と歎き悲しと彼粧

具を捨て終は此所の川へ身を沈めり故に号とす

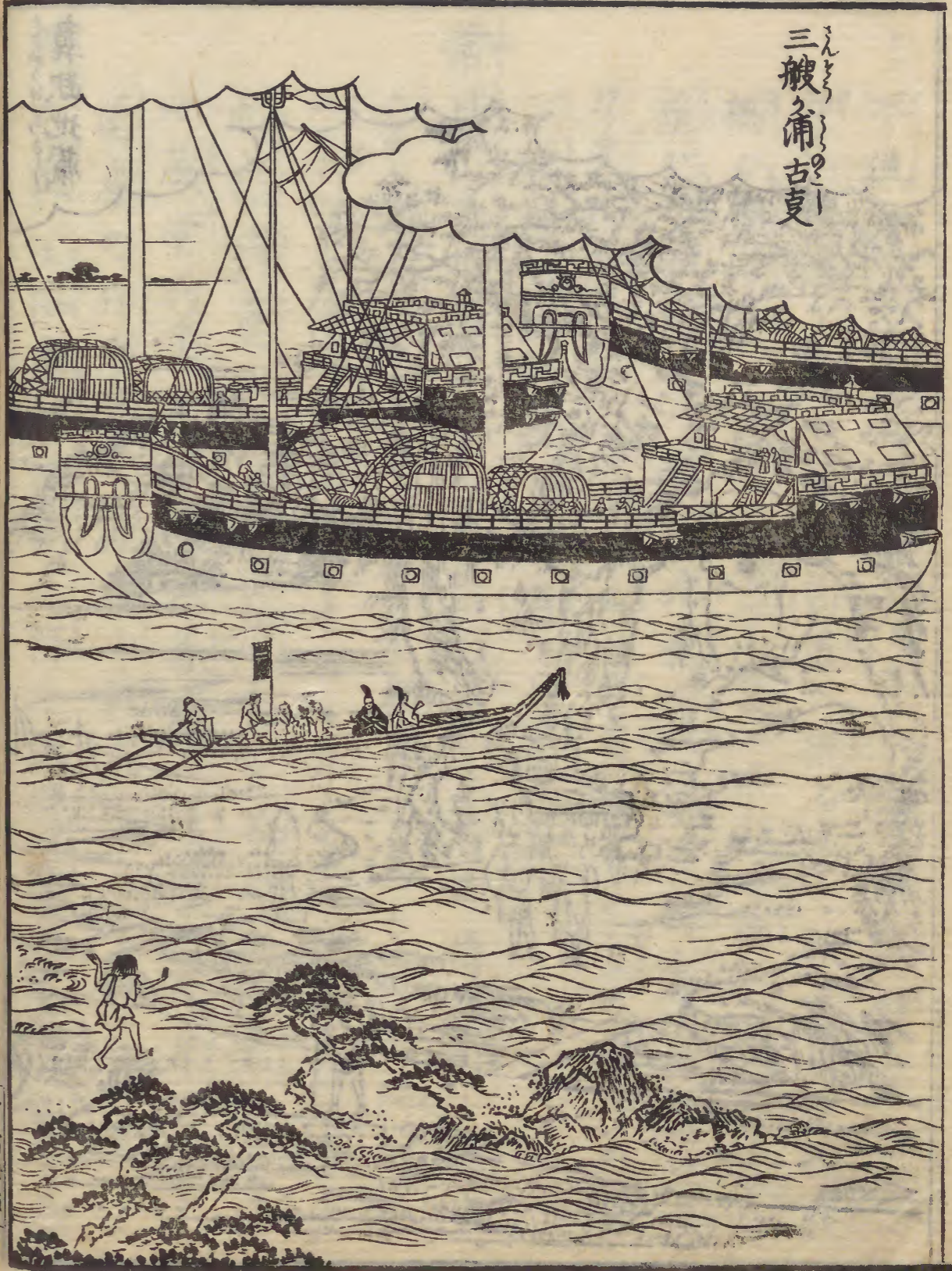
侍後川 川村と大間村との中間光傳寺の前を流る川の

鼻缺地藏



下流をり水源を鎌倉より發し、未ハ三艘村より、鹽濱へ
 少く海灣を會し、瀬戸街道へ横より、架を橋を侍從
 橋と号名義ハ、油堤の条下よ云々、此橋を渡り、右の
 道ハ武蔵相模の國境地蔵の辻へ、如く鎌倉へ往還の道
 なる、南の道ハ三浦三崎への通路なる、左の川傍の道ハ
 三艘浦又相州境浦郷等への道なり

常見山光傳寺 同所北の端道より、右側侍從川は傍
 あり、浄土宗あり、鎌倉光明寺は屬を、阿彌陀
 如来の本像を立像中、四尺許あり、作者あり、
 岡山ハ得蓮社忍譽靈傳上人と号門の内、右の方
 地蔵堂あり、本多地蔵菩薩ハ立像六尺許あり、
 運慶の作あり、云地福山蔵光寺と号、
 界地蔵 土俗鼻缺地藏と称し、光傳寺より九丁あり



三艘之浦古夏

西の方鎌倉道の傍にあり巨巖の壁立し一所は
此の像を鑄せしと云ふ鼻缺地蔵と云 此所ハ武蔵相摸の
國界中一ヶ村と号す

三艘浦 六浦の南向三艘村にあり永祿九年の春唐船

三艘此浦に着岸せし故に名付くとも鎌倉志云其時
舟に載来り一切経及び青磁の香爐花瓶等を皆
称名寺に傳へりありと云

海蔵山太寧寺 三艘浦の東瀬崎村にあり 界地蔵あり 往古ハ
布金の道場中一ヶ薬師寺と号し 眞言宗なり 蒲

御曹司源範頼公生害あり 後其法号を採り太寧寺
と号し 千光國師閑山とあり 禪林に轉じ鎌倉建長

寺の属寺とて 薬師寺の号の廢せんを歎き 寺前村の地へ
本寺薬師如来立像丈五尺あり 十二神將の像ハ三尺中

あり 共に運慶の作 鎌倉志に當寺勸進帳を引く
云往古 伏見帝永仁年間此村に貧女あり 父母の忌

日に當りて佛に供養し 佛に供養し 佛に供養し 佛に供養し
巻子とて賣りて佛に供養し 佛に供養し 佛に供養し 佛に供養し

容易に買人なり 或時童子一人来り是を買ふに價を
以て父母の忌日に供養の料に充てり 佛前小至る小

件の多きを多くあり 依りて知ぬ如来貧女に純孝の志を
感し 自介以来へを薬師と云とあり 佛へ肩願の事あり

時其祈願成就し 報賽とて 佛へ肩願の事あり
蒲冠者 範頼靈牌 堂神儀裏に範頼公建久癸丑年八月と

彫付 範頼墓 本堂の後の山麓にあり 高さ二尺六七寸あり
又頼朝に申し伊豆に越景時父子三人五百餘騎ゆく修善寺に押寄せ

又頼朝に申し伊豆に越景時父子三人五百餘騎ゆく修善寺に押寄せ
又頼朝に申し伊豆に越景時父子三人五百餘騎ゆく修善寺に押寄せ

範頼ハ或坊より袖より大口計りて
 其後景時煙を静め範頼の焼首を取
 るあり鎌倉志云く級を此地の華に
 差詰りて散く射あひたる
 自害してを失はれる
 頼朝えせをまろ

題 太寧寺六首

寺樓一抹晚江煙

朝送鐘聲落釣船

殘曉香消拍子煙

閒鷗容我社中眠

聞君去借江村宿

老來無夢趁漁船

六浦遙連三浦煙

一夜鷗邊看月眠

興來撐棹竊佳處

越風隨岸幾移船

山街夕日水籠煙

月落前灣猶未眠

蓋世功名身外事

雪後蘆花月滿船

晚興遲留江上寺

幾人能得一菴眠

功名蓋世畫交煙

還愛華亭載月船

一錫歸來楓外寺

三山翠映白頭眠

失墜危於灑頰船

白沙翠竹閉門眠

白沙翠竹閉門眠

風光殊小

絶海

當寺書院北小向山瀬戸の入海を眼下より臨み風光殊小

勝れし寺寶は範頼自筆法古奇の懸幅及び陣中用

宮根権現社瀬崎の東室本村あり又民家の間より犬樟の

老樹あり

雀浦同所の南に出崎を以て菅神の小祠あり故より土人ハ

天神崎とも稱を此地の海灣と浦の江と云

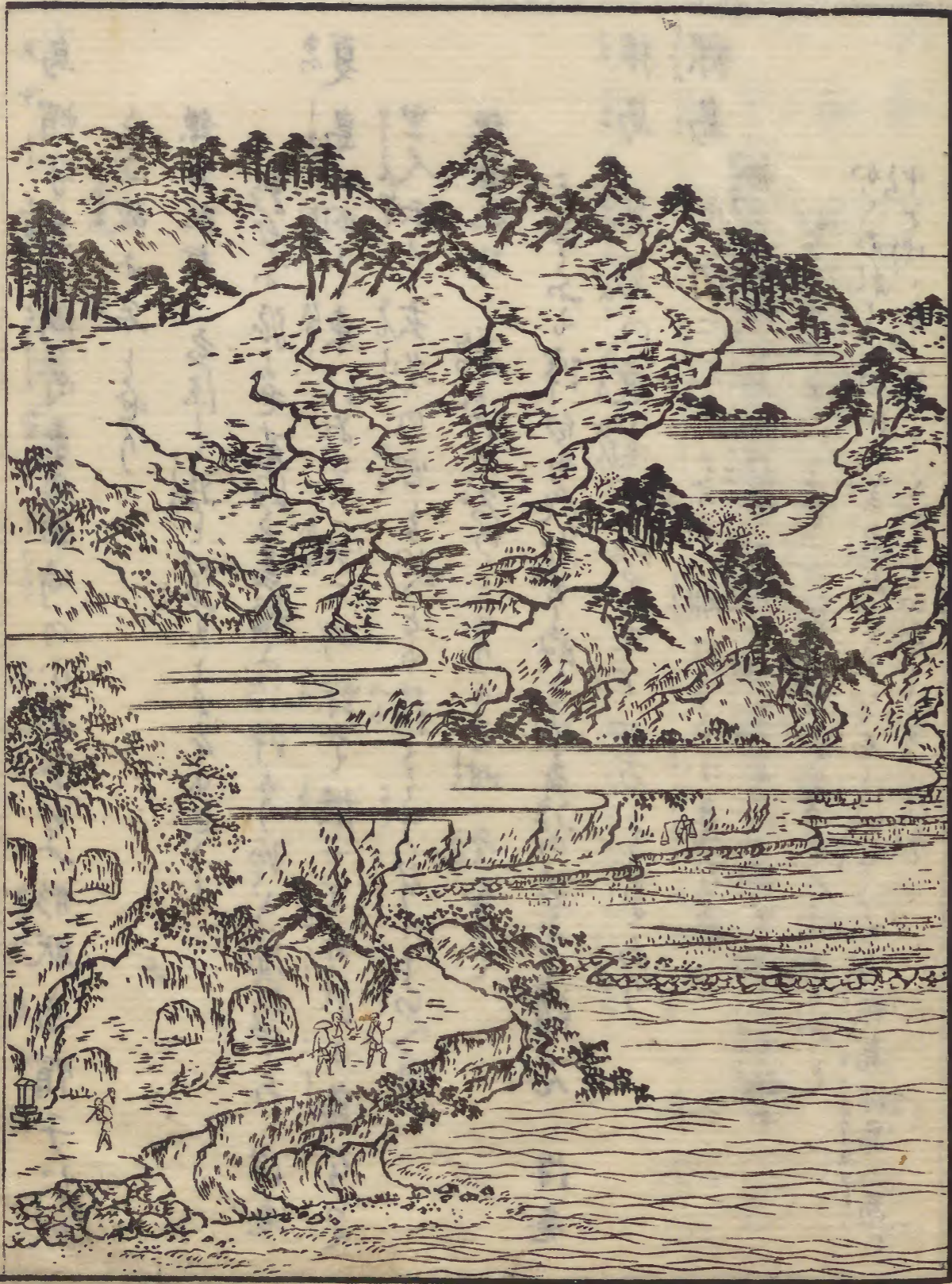
中着巖同所絶壁の下あり大と二間四方には盤石あり潮尽

根附巖同所百歩と云を隔て西南の方には崖下ありと云

田國雜記

浦川の湊と云ふ所あり

道與 准后



すめ
の
浦



鳥帽子島 同所東の出崎の小島と云ふ形状鳥帽子に似
たる故小名とせり

鎌倉記行 多保一海と云ふと云ふ

新夕小浪を巻ぬる鳥帽子沖より西き風新やれ洋庵

夏島 同所東にあり長三町餘を横一丁半此小島なりと

里人云く玄冬の雪と云ふ積りのなりと云ふ

鎌倉記行 夏島を名のとなりて村ハありと

三冬ふも降白雪たぬぬと云ふ島の名や清人 洋庵

猿島 夏島の東南にあり五丁四方を占むあり

裸島 同所二三町を占む離れる小島なりと

按て洋庵和尚の鎌倉記行に笠島と云ふ名と擧ぐて其泳ハ

かきしちやあそと云ふの夕始ぬぬぬ常を人ありと

かくあれともは地は笠あわらりと云ふは猿島裸島二島の
中と云ふは、わしと云ふは、かくをいひてあらん

甲香 此れハ金澤の名産なり兼好法師の徒然草に甲

香ハ螺貝の様なり小くく口の程此細長なり出する

貝の蓋なり武蔵國金澤と云浦にありと云ふ所の者ハ

乃かきと云ふと云ふは、はと云ふは野槌小今金澤

ぬく尋は六むといひまはは細とも云と云ふ

天保六年四月廿五日



Handwritten text in cursive script (sōsho) on the right page, including the characters '日野本' and '香'.

